

## 吾<sup>バン</sup>が守<sup>ムリ</sup>研究会案内状

玉元 清

アナタは、畳一枚ほどの小さなカラオケステージで、サンシンをつま弾きながら歌を歌っていた。聴衆はワタシだけ。それもカウンター席で背を向けたまま。

「滑り込みセーフね」

ヒロコママが、入口のカギを締めてカウンター内に戻ってきた。

「この頃は十二時で店を閉めないと、風紀なんとかで警察がうるさいからね。……ビール？ レモン炭酸割り？」

「きょうは車持って来たし、トマトジュースにします」

アナタは、十五センチほどの高さのステージを下りて来て、二つ席を空けて、並んで座った。そこにはすでに、一合の泡盛カラカラとグラスとアイスペールがアナタの帰りを待っていた。

ヒロコママが、トマトジュースの入った円筒のグラスを織物のコースターに置きながら、ワタシのことを、スキューバダイビングの怖いもの知らずのお嬢さん、とアナタに紹介した。そしてアナタのことは、昔のことをいろいろ聞いて調べている国文学の偉い先生、と紹介した。アナタは、まだ先生じゃない、と照れながら抗議し、ママは、どうせそうなるんだからいいでしょう、と笑って応え、グラスに泡盛を注ぎ、氷を入れ、水を入れ、マドラーで三、四回かき混ぜた。

友恵さんが、いらっしやい、と言いながら台所から出て来て、手に持ったソーメンチャンプルーと野菜炒めの皿を私の前に並べた。

「外は綺麗な十三夜の月夜ですよ」

ワタシは、ソーメンチャンプルーを小皿に取りながらママに話す。

「きょうは月の綺麗な日曜日だしお客さんも二人きりだし、さあ、一緒にゆっくり飲みましょう。ハイ、友ちゃんも」

ヒロコママは瓶ビールを開けて二つのグラスにビールを注ぎ、一つを友恵さんの前のカウンターに置き、改めて、アナタの名前と仕事、ワタシの名前と素性を紹介した。

「ダイビングをするためにね、大学を卒業したらすぐにこんな遠い島まで一人でわざわざ来て、アルバイトをしながら潜ってばかりいる物好きお嬢さんでね、今は、アルバイトの帰りなの」

ワタシはヒロコママの語尾を繋いで話題を変えた。

「さっき歌っていた歌はなんていう歌ですか。なんだか心に感じるものがあります」

『吾が守』<sup>バンムリ</sup>といつてね、この島の子守歌

バンガムリ？ 島に来て二年近くなるが、島の言葉についてはまだ覚束ない<sup>おぼつか</sup>。

「あの……、不躰<sup>ぶしつげ</sup>ですみません。もう一度聞かせていただけませんか？実はこれから、ママと友恵さんにお話ししようと思っただけで、私、あした島を離れます。そして、

しばらくは来ないと思います。もしかすると、きょうがこの島での最後の日になるかもしれない。子守歌ってその土地の人々を育ててきた歌ですよ。ですから、私の二年間を育ててくれたこの島を忘れないためにも、島の方々を育てた子守歌を、自分の記憶にしつかりとどめたいと思います。勝手なお願いですけど、お願いしていいですか」

ワタシは、アナタとヒロコママと友恵さんにその都度向きを変えながら話した。

「帰ってしまうの？」

「家の仕事を手伝うわけ？」

ヒロコママと友恵さんが、同時に声をあげてワタシを見た。ワタシは、そう、と力なく応える。そう……。四十七歳の父が突然脑梗塞で倒れた。島に来た時からいずれは帰るところになると覚悟していたが、こんな理由ではなかったし、時期も、ワタシの当初の筋書きよりも十年以上早い。一時は、妹の真里とかおりに期待したが、真里は今年大学に入った

ばかりだし、かおりはまだ高校生。やっぱりワタシが帰るしかない。ワタシは二十二歳で江戸時代から続く温泉宿〈無杖温泉〉の若女将になる。

アナタは、オンザロックの泡盛を一口含むと席を立ってミニステージに向かった。ステージの隅にはサンシンがあつて、隣の台には歌集帳が積まれている。〈ハーモニー〉はその頃にしてはまだ珍しい走りのカラオケスナックで、客は、8トラックのカラオケ曲に合わせて、歌集帳を見ながら歌った。現在のよう  
に、映像を見ながら、画面に挿入される色の変わる歌詞を追って歌うカラオケ装置は、まだ開発されていなかった。

吾が守<sup>バシ</sup> ふどうわさあばあ

ヨイヨイ

姉が揺ぎ<sup>アミ</sup> たきわさあばあ

ヨイヨイホーイー イーイ

単調なメロディーと囃子の繰り返し。相の手のように入るサンシンの音。言葉の意味は分からないが、なぜか心に沁みる。アナタは五分ほど歌ってステージを下りてきた。

「それぞれの村で歌い継がれてきた子守歌ですから、歌詞は村々で微妙に変化して、いくつもあります。きょうはその中の一般的に歌われている歌詞で歌いました」

「どんな意味ですか？」

「私が子守をして育てるから、早く大きくなりなさい。大きくなったら、男の子なら、学問を修めて偉い役人になりなさい。女の子なら機織り上手になりなさい。そして、子守した私の自慢の子になりなさい。……そんな感じですかね。ねえ、ママ」

「はい、その通りです」

ヒロコママは口元を緩めて言い、グラスに泡盛を足す。

「それから、お父さんは蛸を取りに行ったので、大蛸だったら一手ずつ、小蛸だったら

一匹ずつ分けましょう。お母さんは芋を掘りに行ったので、大芋だったら割って分け合い、小芋だったら一個ずつ食べましょう、という歌詞もあります」

「……」

「この吾が守は、守姉が守子を寝かしつけるために歌った歌です」

「ムイアング？」

「直訳すると子守をするお姉さん、です。」

この島には守姉という風習があつて、乳離れした子を、親ではなくよその家の女の子が子守したのです。これが守姉で、子供が守子です。守姉に選ばれることは名誉なことで、それに、守姉と守子の絆は、親子とかきょうだいのように深いと聞いています」

「私も守姉で友ちゃんが守子よ」

ヒロコママが、アナタの前の小皿のピーナツを一つ摘まみながら話に加わる。

「小学校六年生の時に友ちゃんの守姉になったの」

「そう、私が守子ムイツウワです」

友恵さんが少しおどけながらヒロコママの右手に抱き着いた。

「友ちゃんが三歳の時に戦争中でもあったけど、守姉ムイアンガはちゃんと務めたさあ。お陰で、今では友ちゃんに助けてもらっている」

「そんなことはありませんよ。今でも守姉ムイアンガに助けられています」

ワタシがハーモニーを知ったのは島に来て直ぐだから、もう二年近くなる。ヒロコママの明るくて気さくな人柄に魅了されて通うようになった。母とヒロコママの年齢が同じ、というのも関係したかもしれない。ヒロコママは終戦直後に中学を卒業して、結局、高校には行かずに就職した。そして、ちょうど十年前に知人からお店譲渡の話があつてハーモニーを始めた、と言うことだった。お店は繁盛している。常連さんの話では、ヒロコさんがママになってから繁盛した、と言うことだった。友恵さんは、日中は美容師として働き



ながら、一年前からハーモニーを手伝っている。でも、ヒロコママと友恵さんが、ムイアンガ守姉とムイツウワ守子の関係にあることは知らなかった。

「しかし、子守歌なのに、ある地域によっては、あなたのお父さんとお母さんは何処行った、支配者を殺そうと毒魚を捕りに行った、という怖いフレーズもあるんです。圧政で人々が苦しめられていたということを物語っています」

そう言うと、アナタは何か口ずさみ始めた。たぶん、島の言葉で、支配者を殺そうと毒魚を捕りに行った、を歌っている。

「みゆきちゃん、月下美人見たことある？」

ヒロコママがいきなりワタシに聞いてきた。

「いいえ」

「タケシ君は？」

「いいえ」

アナタも応えた。

「友ちゃん、持ってきて」

ヒロコママに言われて、友恵さんは通用口

から出てゆき、台車に鉢植えの植物を乗せて来てテーブルの上に置いた。鉢は大振りだが友恵さんは軽そうに持ち上げた。

「照明を少し暗くしようね」

ヒロコママはカウンター内のスイッチで照明を落とし、それからフロアに出て来た。

「きょうは九月二十五日。この花の季節はそろそろ終わるけど、最後に頑張っ了一遍に六輪も咲かせた。君たちは幸運な二人です」

ワタシは月下美人を初めて見る。鉢から一本の茎が出て枝が何本も分かれている。枝には、サボテンの葉のような肉厚な葉が数枚付いていて、その葉から、大きくて白い花がU字型に垂れ下がり上向きで花開いている。花の造形は花卉が何層もあつて華麗で、雌蕊めしべを中心に数本の雄蕊おしべが花芯から出ている。花は華麗なのに、香りは、透き通るような微かな甘い香り。薄暗い照明の中で花の白さがひと際引き立ち、香りが漂うように流れた。

「二時ごろまでに満開になり、その後は萎

み始めて、翌朝には完全に萎んでしまうの」

と、ヒロコママ。

「実は生ならないのですか？」

「同じ株から出た花同士では受粉しても実  
はできないって。ほら、何と言った？自家：

不：和合性。別の言葉もあつたけど……」

「他家受粉たかじゅふんですか」

タカジュフン。アナタが言う。ヒロコママ  
は、薄明かりの中で、そう、そう、と頷く。

こんなに華麗なのにどうして一夜限りなの、  
と思つて見ていると、なぜか一夜限りが自分  
自身とオーバーラップして、涙が出た。アナ  
タとヒロコママと友恵さんは、花のこととか  
アナタの仕事のことなどを話している。

そろそろお開きにしましょうか、と言うア  
ナタの声で、ワタシは腕時計を見る。午前一  
時。この島での最後の夜。堪えていた涙が一  
気に溢れた。今度は隠す必要もなく流れるま  
まにして、ヒロコママに抱き着いた。抱き着  
いたまま、ありがとうございます、と何度も

言った。何度も言ったが、声は嗚咽と交じり合って言葉にはなっていないかった。

アナタとワタシは精算を済ませると、通用口から外に出た。ヒロコママと友恵さんも出て来た。友恵さんとハグをした。空には十三夜の月。車が三台駐車している。そのうちの一台がワタシの車。ワタシはアナタに声を掛けた。

「送りましようか？」

「いいんですか？」

アナタは応えた。

ヒロコママと友恵さんに見送られて、二人の乗った車は飲屋街を後にした。

アナタの泊まっているホテルとワタシのアパートの方向には、九十度の角度があった。

「今回も採集で来島されたのですか？」

「いいえ。前回採集してまとめたものを関係者に確認するために、きのう来ました。明日は、…と言ってももうきょうになりました

が、次の島に行きます。講義が始まりますと  
なかなか自由な時間が取れませんから」

「講義も持っていますしやるんですか？」

「いいえ。まだ研究員の身分ですから。来年からは開設することになると思います」

狭い街なので、車なら目的のホテルまでは  
五分も掛からない。

「もう少し走らせていいですか？」

「いいんですか？」

「ぜひ」

車はホテルの前を通り過ぎた。

「民間に伝承されているものを採集して記録して保存するわけですが、私は特に埋もれているわらべ歌、子守歌、言い伝えなどを中心に採集しています。埋もれているということとは権力者に都合が悪いことだったり、弱者の声だったりします。ですから私は、それらの声を表に出して、当時の時代を正しく伝えるお手伝いをしたいと思っています。一方で、これは埋もれた方々の救済にもなるんじゃない

いか、と思っっています。吾が守も、背景は、役人が権力者として君臨していたということ物語っています。そして、圧政でどうしようもなくなったムラでは、毒魚で支配者を殺せ、という子守歌になるのです」

「毒魚の子守歌を聞いて育った子供たちが歌の通りに支配者を殺せば、確実に吾が守殺人事件ですね」

「そうです。計画的なスナイパー養成子守歌です。でも、この歌は裏では歌われても表に出ることはなかった。表に出ているらムラは取り潰しになっていたでしょう。ですから、吾が守殺人事件は起こらなかった」

「そろそろ二時です。月下美人が満開になる時間ですね」

「ヒロコママにはいい花を見させてもらった。一夜だけの花。感動的でした」

「……今夜は眠れそうもありません。もしよろしければ、どこか遠出して、一緒に夜を明かしていただけませんか？」

「いいんですか？ 私も眠れそうにありません。でも、明日出発されるんでしょう、体調は大丈夫ですか？」

「大丈夫です。スキューバダイビングで体は鍛えていますから」

「それならパウ岬<sup>みさき</sup>まで行きましょうか。あそこで、一緒に日の出を見ましょう」

車はパウ岬に向かう。島の東にある岬で、全長二キロメートル余り、幅は二百メートル足らず。蛇のように少しくねりながら海洋に突き出ている。それで蛇の岬、パウ岬<sup>みさき</sup>。

午前二時ともなるとさすがに人家の明かりはない。月が、薄いベールをかぶせた様に辺りを照らしている。

パウ岬に入る。月明かりで道が白い。駐車場は岬の先端から三百メートルほど手前にある。車を停める。当然誰もいない。

「月下美人は自家不和合性ですから、同じ株からでた花同士では結実しない。人は否定的に言いますが、私は、それは違うと思うの

です。同じ株から出た花同士だからこそ、お互いを一番よく理解し合える、心が通じ合えるとも言えると思うのです。月下美人は、結実することよりも、心が通じ合えることを選んだのです。切ないけど美しい選択です」

ワタシは返答しないで黙って聞いていた。

「外に出て、少し歩きますか？」

ワタシは、ええ、と応えてドアを開けて降りた。アナタも降りた。辺りを見ながらゆっくり歩く。西に傾きかけた煌々とした月で辺りが輝いている。遠くの環礁の白波がはつきり見える。リズムよく波の音が聞こえる。

「海、恐くないですか？」

「いいえ、全然。スキューバダイビングやっているから、むしろ潜りたくなります」

ワタシは明るく応える。

「どうしてスキューバダイビングを始めたのですか？」

ワタシはまず家業を話し、それから、ばあちゃ、佐々木ノゾエさんのことを話す。曾祖



父母の代に十二歳から住み込みで働くようになり、父の守姉ムイアシガでありワタシの守姉ムイアシガであったこと、五年前、一九七二年七月、沖縄が日本復帰した年に、ばあちやの還暦祝いで、ばあちやと二人で沖縄に来たことを話す。

「高二の時でした。ブナ林と温泉の淀みしか知らなかったワタシには、沖縄の海は強烈でした。グラスボートで海中を見ていると、スキューバダイビングの方が餌付けをしながら魚と一緒に泳いでいるんです。もう言葉には表せない感動でした。それで、スキューバダイビング講習の受けやすい街の短大を選んで、そして講習を受け、卒業すると海の綺麗なこの島に来たんです。二年近くなります。そしたら、父が脳梗塞で倒れて……」

ワタシは今のむじょうおんせん（無杖温泉）の状況も話した。母は父の介護に追われ、ばあちやが苦勞していることなど。

「大変ですね。しかし、続けなければなりませんからね」

「続けなければなりません。江戸時代からの湯ですから……」

潮風と波の音が、火照ったワタシの身を癒してくれているようでした。

「私もあなたと同じ年の同じ月に初めて沖縄に来ました。大学に入学した年で、その前年に大学の教授が出版された南島の古謡に関する本があつて、それを読んで、特にこの島の子守歌に魅了されました。それで、どんな島が見なければならぬと」

「飛行機を降りると、ばあちゃんは初めての旅行で、その上初めての飛行機だったので疲れていました。それで待合室でテレビを見ながら休みました。正午のニュースで大相撲の高見山優勝を放送していました。ばあちゃんが高見山のことをとっても褒めていたので憶えています」

「その日は、七月十七日、月曜日です」

「えっ？」

「私も東京から那覇空港に降りて、島への

乗り継ぎ便を待って、あの待合室でテレビを見ていました」

「すると、あなたと私は、同じ日の同じ便に乗って、初めて沖縄に来た、ということですか？」

「そういうことですよね。奇遇です」

十三夜の月は西の空の中頃を下り始めていた。アナタとワタシは、環礁に碎ける白波を指差し眺め、手を庇にして月を見上げ、昼間のようなパウ岬をゆっくり歩き、立ち止まり、話を交わした。奇遇です、の言葉に背中を押されながら……。それから車に戻った。

それぞれのシートを倒して横になった。

「また会いませんか？」

ワタシは車の天井を見たまま言う。

「いいですね」

アナタも車の天井を見たまま応えた。

「三年ごとに会いませんか。出会った日の出会った時刻、この場所で」

「九月二十五日の夜の十二時、このパウ岬

で。まずは三年後の一九八〇年九月二十五日、  
そして次の三年後も、次の三年後も」

アナタが応える。

「忘れてもいいですからね」

「お互いに。…でも私は忘れません。三年  
ごとの七月一日には、『吾<sup>バン</sup>が守<sup>ムリ</sup>研究会』の名前  
であなたに案内状を送ります」

「それも忘れていいですからね」

「忘れません。約束です」

それからしばらく車の天井を見ていて、そ  
して、波の音を聞きながら寝入った。

アナタに呼ばれて目を開けると、朝日が昇  
る直前だった。ワタシには、ダイビング専用  
で後部座席に常備してあるタオルケットが、  
掛けられていた。

車から降りて、水平線から昇る朝日を二人  
で眺めた。オレンジ色に輝く一筋の道が朝日  
から出て、静かな海を伝ってこちらに向かっ  
ていた。

「それでお母さんは、その三年後の、一九八〇年九月二十五日、夜の十二時にはパウ岬みさきに行っただの？」

「当然でしょう。その年の七月一日付で、ちゃんと『吾が守研究会』の案内状が届いたんですから。五か月の健太郎を連れてパウ岬に行きましたよ。あなたと佑介はまだ生まれていなかったからね」

「お兄ちゃんが生まれていたということは、お母さん、結婚していたんでしょう？」

「そうよ。島から戻ってその翌年には結婚しましたからね。当時お父さんは市の観光課に勤務していて、お母さんが戻るとすぐにおじいちゃんにお付き合いのお願いに見えて。悪い人ではなかったし、家のことも考えて入り婿で安杖あんじょうの姓を名乗ってもいいと言ってくれたし。おじいちゃんも体が不自由になつたせいでお母さんのことを心配して、いい人だし早く結婚した方がいい、となつて」

「恋愛感情は全くなし？」

「なし。あの時はそれどころではなかった。でもね、お父さんと結婚したことは後悔してないわよ。むしろ良かったと思っていますからね。心配しないで」

心配もなにもこれまでに安杖家で波風が立ったわけでもないし、それに私ももう二十九歳、そんな感情に陥るような年齢でもない、と結子は心の中で言う。

結子が無杖温泉を職場にしたのは大学を卒業して直ぐだから、七年になる。そして、最初の年から、十一月に入ると、母に随行して東京の得意先の会社や旅行代理店にあいさつ回りをするようになった。以前は兄の健太郎と一緒にだったが、男はどうも愛想が悪いと結子に代わった。次兄の佑介は町を出て建設会社に勤めている。十一月とは、紅葉のピークが過ぎ雪の降る前、というタイミングで、東北の温泉宿に少しゆとりが出来る。有難いことに、このようにあいさつ回りをすると、雪

深い冬に五、六組の予約が増える。

きょうは始発の新幹線に乗って九時四十七分には東京駅に着いた。そして、手際よく訪問先のあいさつ廻りを済ませ、十五時二十分には帰りの新幹線に乗った。

結子が母のペンダントに気づいたのは東京に向かう新幹線の中だった。十八金ホワイトゴールドで設えた、花卉が幾層にも重なって広がる繊細な作りの台座に、球形の真紅な珊瑚が乗っている。血赤珊瑚という高級な珊瑚だ。母によく似合う。

「きれいなペンダント。初めて見た。よく似合っている」

「でしょう。還暦祝いにいただいたの」

「どなたから？」

父からのプレゼントなら、いただいたの、とは言わない。それで、その方との四十二年前の話が母から出た。しかし、ちょうど新幹線が東京駅に到着して、話は持ち越しになっていた。

今、新幹線は大宮駅を出発した。次駅の仙台までは一時間以上もある。何の邪魔も入らずに母の話がゆっくり聞ける。

「それで、その人も来ていた？」

「その人じゃなくて、その方と言いなさい。

そうじゃなければ話してあげない」

「はい、はい。それで、その方もパウ岬にお見えになっていたのですか？」

「当然でしょう、約束ですから。先に着いて駐車場で待っていました。お母さんはその方の車に移って、長男の健太郎です、と紹介した。もちろん健太郎は眠ったままよ。その方は、結婚したんですか。おめでとうございます、と言って、嬉しそうに健太郎の顔を覗いていたわ。その後、車を降りて辺りを歩いた。その夜は八月十七夜の月、つまり、中秋の名月の次の次の月、立待月でね、とってもきれいな月の夜だった。でも、健太郎を抱い



ていたので早々に車に戻った。あの方は講師になつて講義を持っている、と話していたわ。もちろん、島々の埋もれた歌の採集も続けている。そして、いきなり、百恵ちゃんもいる。そして、いきなり、百恵ちゃんもいる。今年中に結婚するそうですね。学生が持っていた百恵ちゃんの自伝『蒼い時』読みましたよ、と言つて、またお母さんの結婚を祝福して、健太郎のために、吾が守を繰り返し歌つてくださいましたわ」

六十四歳の母が、ワクワクする気持ちを抑えられない少女のように話している。従業員の前頭に立って仕事を熟し、性格的には、てきぱき、さばさばの言葉がピッタリの母だが、その裏に、豊かな感性の水脈が流れている。

結子が、子供の頃にはあちやから聞いた話では、十数ある山奥の温泉宿を一つにまとめて温泉組合を作り、『秘境の温泉郷』として世間に売り出すようにしたのは母のアイデアだったと言う。そして、組合員間の金融事業や共同仕入れ、行政対応、広報活動などを組合

が担当し、各温泉宿はそれぞれの営業活動に専念するという現在のスタイルをつくった。

その結果、ブナ林に囲まれた東北の山奥の温泉宿は、次第に『秘境の温泉郷』として世間に広まった。組合結成の時、父は市の観光課から組合に移った。一九八二年、結子が生まれる八年前の出来事になる。

若いのによくやった、とばあちゃんは母のことを褒め、父は母の苦勞を語り、各温泉宿の組合員は今でも母の功績を称賛する。が、肝心の母からは、自慢話のひとつも聞いたことがない。過ぎたことには頓着しない。これも母らしい。

ばあちやからはその時に結子という名前の由来も聞かされた。へ結いへは南の島の言葉で、絆とかみんなで一つになって助け合うという意味の言葉、ということだった。

「次の三年後も行っただの？」

「当然でしょう。七月一日付で吾が守研究会の案内状が来ましたから。二回目のその日

は台風だったわ」

台風十号が島に向かっていたので、二日前に島に入った。台風は、翌日の朝からまともに島を襲った。そして次の日、つまり九月二十五日の未明から島を離れ始めた。でも、雨と風と時化、台風の余波はその日の夜まで変わらず続いていった。

十一時前に市内のホテルを出て、十二時五分前にパウ岬の駐車場に着いた。いつもの倍以上の時間がかかった。途中、雨と強風で車は揺れ、視界は十メートルほど。行き交う車は一台もなかった。パウ岬はさらに雨も風も強く、車は飛ばされそうになり、その上、波の音がおどろおどろしく響いて魔物が待っているようで、さすがに竦んだ。

アナタの車は、駐車場の中央にあるコンクリート造りの休憩所の風を避けた場所に駐車していた。ワタシは隣に駐車した。アナタが降りて来てワタシの車のドアを開け、ワタシ

を降ろしドアを閉め、今度はアナタの車のドアを開け、ワタシを入れ、ドアを閉めた。女  
の力では及ばず、男の力でも必死の業だった。  
アナタはタオルを十分に準備してあった。ア  
ナタもワタシも、一分足らずの間でずぶ濡れ  
になった身体を、服の上から何度も拭いた。

「台風なのに来てくださいましたね」

「当然でしょう。研究会の案内状も届きま  
したから」

アナタは熱いコーヒーをポットに入れて持  
ってきていた。コーヒーを飲んで暖を取り、  
それから近況報告を始めた。

アナタは二年前に学科の教授の紹介で見合  
いをして結婚し、今年、長男が生まれたこと  
を報告した。長男の名前は、アナタの名前を  
取って、毅彦にしたということだった。

ワタシは、温泉宿組合をつくり、『秘境の温  
泉郷』の名前で全国的に広報活動を展開して  
いることを話した。アナタは、とても素晴ら  
しいと褒め、弱者はまともれば強くなるし、

埋もれたものを表に出せば必ず賛同者がいる、と力強く言った。ワタシは勇気を貰った感じがした。

「フィールドワークは夏休みが中心になりましたが、今度の夏休み、島の離島の小島で興味ある話を採集しました」

「どんな？」

「あの世とこの世を行き来する話です」

風が急に強くなり雨が車の屋根を打った。

アナタはコーヒーをワタシとアナタのコップに入れ足し、一口飲んだ。ワタシも同じように一口飲んだ。

「古老の話では、島では、一日の始まりは午前の三時で、一日の終わりは夜中の二時だそうです。私たちの一日は太陽が中心で、太陽が地球の裏側の子午線を通過する時間を正子しょうしと言いますが、その正子しょうしから次の正子しょうしの間、つまり午前零時から次の午前零時までを、私たちは一日としています。正子しょうしとは正しい子の刻ねの意味で正午しょうごの対語です。ところが島

の場合は、夜中の二時に生命は潰え、三時に生命は誕生、もしくは再生するという自然界の生命のバイオリズムを大事にしている、それで一日の始まりと終わりを決めているのです。太陽を中心にするか生命のバイオリズムを中心にするか、実に興味深い話です」

「ヒロコママが、月下美人は二時ごろまでに満開になる、と言っていましたけど、その二時ですね」

「そうです。月下美人は一日で咲き切ろうとしていたのです。」

「すると、二時と三時の間の一時間はどうなるのですか？」

「そこです。まさに興味深いのがこの狭間の時間です。古老に聞きました」

「あなたはコーヒーを一口含んだ。ワタシもそうした。」

「古老が言うには、その時間はグソーヌユウだそうです」

「グソーヌユウ？」

「漢字で書くと『後生の世』と書くのでしよう。亡くなった方々が住むあの世。つまり、夜中の二時から三時の間は、霊界の時間。霊たちが自由に動き回る時間だそうです」

「でも、本当に霊が出歩くんですか？」

「島のみなさんの生活に溶け込んでいますから本当だと思いますよ。ご主人を亡くされた奥さんが、その狭間の時間にご馳走を作って待っていたら、ご主人はちゃんと現れたそうです。その奥さんは懐妊したそうです」

「本当ですか？」

「そうなんです。私も、本当ですか？ と古老に確かめました。古老は、本当です。私がそうですから、と超然として応え、さらに、私が知っている方の名前をあげて、あの方もそうですよ、と応えました。そして、片方だけではなく、お互いの会いたいという思いが強ければあの世もこの世もない。必ず会える。グソーヌユウがそういう時間だ。と古老は話しました。不思議な話ですが、あの小島では

これがあたりまえなのです。もしかすると、グノーヌユウは私たちの周りの何処にでもあ  
るかもしれません。古老は、夜中の二時から  
三時の間は霊たちが出歩いているので、人間  
は、霊を刺激しないように静かにしていたほ  
うがいい、と言います。この時間にいろいろ  
な事故が発生するのはそのせいかもしれませ  
ん。一日の始まりと終わりを生命のバイオリ  
ズムで決め、その上で、人間の時間と霊たち  
の時間を共存させる。すごい島だな、と古老  
の話聞きながら思いました」

「会いたいという思いがお互い強ければ、  
あの世とこの世の関係なく、二人は必ず会え  
るということですか……」

三時も過ぎて、台風の余波も少し衰えてき  
た。ワタシはふっと、夏のブナ林の葉擦れの  
音と冬の垂<sup>しず</sup>り雪の音を思い出していた。狭間  
の時間に、これらの音が特に響いていたよう  
な気がする。父が風呂場で倒れたのは、客が  
上がったから湯殿の掃除をし、湯船につかり、



着替えた後、午前二時二十五分だった。

「無杖温泉では、夜中の二時から三時の間は湯殿に鍵を掛けて従業員も入れないけど、それはお母さんが始めたんだ」

「そうよ、一九八三年十月からね。みんなには、お湯も休ませてあげなさい、と言っているけど、本当はね、その狭間の時間に、ご先祖さまや周りの霊たちにも、ゆっくり温泉につかっていたかったですよ」

「どうして三年越しになったの？」

「最初に出会った時、あの方は二つ席を空けて三つ目に座られた。ですから三年越しなの。すぐ隣なら窮屈だし一つ空けたら気になるし、三つ目がね、ちょうどいい距離なの。……それから、三回目の九月二十五日は一歳になった佑介を連れて行ったわ。五回目には、満二歳になったあなただったわ。覚えていないでしょう？……よく眠っていたし。あなたを連れて行ったのは一九九二年。ちよう

どその前の年に、新幹線が盛岡駅から東京駅まで繋ぐようになったの。一人で歩きたがるあなたの手を引いて、新幹線に乗ったのをきのうのように覚えているわ。そして、佑介の時もあなたの時も、あの方は吾が守を歌ってくださったわ。お母さんも家では吾が守を歌って三名を育てたまましたけどね。

大芋ウブンーやつか 割りバりーいだまなー

ヨーイヨイ

小芋ンミンーやつか 一ビトウズズ個だまなー

ヨーイヨーホーイーイーイ

大蛸ウラダクやつかあ 一ビトウテイ手だまなー

ヨーイヨイ —————

母は、体を揺らし、右手で膝を叩きながら歌っている。

「もう四十二年も続いているんだから、その間に、お父さん、どうしてそんなに頻繁に出かけるのか、と言わなかったの？」

「お父さんは言わない。何のために行くのかも知らない。遠慮しているとかそんなこと

じゃないの。いろいろな事を含めてお母さんを大事にしている。包容力があるの。逆にお母さんは我儘かもしれない。でもね、その方との出会いがお母さんを支えてきたの。四十年前、お母さんが二十二歳、その方が二十七歳の時に二人は出会った。その時のお母さんは、もう自分の人生は終わり、という心境だった。けれども、その方が歌う吾が守<sup>バク</sup>を聞いて、それから、話を交わして、月下美人を見て、遠出をして、お母さんは、その方と心が通じ合っているのを感じた。その方が話す言葉の一言一言がすううっとお母さんに入るの。そして、お母さんが話す言葉の一言一言が同じようにすうっとその方に入っていく。どうしてだろう、と思う。でも、理屈ではなく、心が通じ合っていると感じたの。そして、これからの人生も頑張れる、という気が湧いて来た。三年に一度会うのは、二十二歳のあの時の気持ちを忘れないためよ。それでお母さんは今まで頑張って来れた。……あな

たもこれまでにあったでしょう？心と心が通じ合った、と感ずること。ないの。なければこれからよ」

結子は高二の時のことを思う。九月に文化祭があつて、生徒会で学校の歴史を年表にまとめる作業があつた。数人で一緒に始めて、最後、彼と二人で最後の仕上げに取り掛かつた。ところが、みんなが帰つた後、記述にミスが見つかった。いろいろ調べ返し、完成した時は夜の八時を過ぎていた。改めて掲示して眺めていると、いつの間にか、彼は売店からパンと缶のホットココアを買つてきていた。椅子に並んで座り、ホットココアを両手で包んで飲みながら年表を眺めた。彼に特別な感情があつたわけではないが、このままこの時間はずつと続けばいいな、という説明できない温かい時間に包まれた。交わした言葉は、やつと出来たね、頑張りましたね、だけ。文化祭担当の先生が来て、もう時間だよ、と言われるまで黙つて座っていた。あれから十二

年が経過しているのに、今でもあの時のことは忘れない。彼とはそれっきりでその後の消息も知らない。が、あの時の感情は何だったのか、もう一度あの時に戻って確かめたい。人が聞いたらたわいない事かもしれないが、あの時、二人の心は一つだった、と思う。

「六回目の年の一九九五年は大変な年だったわね。阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件。……ヒロコママから十月で引退するというハガキを貰っていたので、その方に会った翌日、花束を持ってハーモニーに行ったわ。まだ若々しいのに六十五歳って。友恵さんは自分の美容室を持っていて、もうハーモニーにはいなかった。……八回目の時は、前の年にばあちやが八十八歳で亡くなったので悲しい報告から始まったわ。ばあちやとは、ひいおじいちゃんが養子縁組をしてあったので、安杖家のお墓に納骨したことも話した。よかつた、と言ってくださったわ。……あなたの生まれる前からおじいちゃんとおばあちゃんは

別棟に住んでいたから、あなたの守姉ムイアングもばあ  
ちやでしたね」

「その方とは三年に一度しか会わないの？  
それ以外は全く交流なし？」

「当然でしょう。頻繁に会いましょう、と  
いう仲ではありませんから。でもね、ご本を  
出版された時は郵送で送っていただいでいま  
すよ。本棚に入っているから、帰ったらご覧  
になるといいわ。『弱者たちの心の声―南の  
島々の詩歌―』というタイトルのご本。吾がバシ  
守カッも入っているし、支配者を殺すことを子守  
歌にした当時の村人の塗炭の苦しみ、二時と  
三時と狭間の一時間の話も。綿密な採集資料  
を基に分かりやすく書いてあるわ。著者紹介  
では教授になっていましたね」

結子はスマホで時間を確認した。もうすぐ  
四時三十分になる。東北の日没は速く、曇天  
も手伝って外は夜の帳とぼりだ。結子は喉が渴いて  
いた。何か飲む？ 母は、ホットココアと応  
える。やっぱり親子だと思いながら、結子は

自動販売機でアルミボトル缶のホットココアを二本買い、一本を母に渡した。二人とも、両手で包んで持ち、暖を取った。

「……二〇一三年の九月二十五日は、還暦のお祝いの品をプレゼントしたわ。前の年にその方は還暦を迎えたのでね。祝いの品は、サンシンのバチとバチ袋。バチは水牛の良質の角製で、指孔はその方の指の太さを想定してお母さんが選んだ。それから、バチ袋は黄八丈の布で、お母さんが実際に縫った。還暦ですからね、出会った三十六年前に戻る、という意味を込めた。出会った時、その方はサンシンを弾いていたし、吾が守<sup>バシ</sup>に、女の子は織物上手になれ、というフレーズがありますでしょう。その方はとても喜んで、これなら採集旅行にいつでも持っていける、って。そして、次会う時はあなたの還暦祝いですね、とおっしゃったわ。その日は旧暦の二十一日で、下弦の月が水平線を見下ろしながら東の空にぽっかり浮いていて、とても綺麗な月の

夜だった。お母さんは若い頃スキューバダイビングをやっていたでしょう。それで、潮の満ち干に関係ある旧暦をつい確かめるの」

二〇一六年九月二十五日は十三回目の約束の日。アナタはいつものように休憩所横に車を停めて待っていた。ワタシは、隣に車を停めて、乗り移った。

「こんばんは」

「こんばんは。：今夜は月が出ませんね」

「もうすぐ出ますよ。そろそろです」

これから昇る月は弦がたわみ始めた下弦の月だが、空に雲ひとつなく、綺麗な月になるだろうと想像できた。駐車場は窪くぼまっているので水平線は見えない。アナタは少し痩せたような感じがした。

「お痩せになりました？」

ワタシはなぜか胸の動悸がして尋ねた。

「来年六十五歳で退官ですから、それを記念して本を出版します。それで、これまでの



採集資料を整理しています。その疲れかもしれませんが、……。これ、採集旅行の常備品ですが、研究室でも文鎮代わりに重宝ですよ」

アナタは上着のポケットからバチ袋を出してバチを取り出し、口元を柔らかく釣り上げた。ワタシもにっこり笑った。でも、あなたは少し痩せている。

「還暦おめでとございます。プレゼントを準備しました。受け取ってください」

アナタは、もう一つのポケットから、ポケットいっぴいの大きさの箱を取り出した。赤いリボンが付いている。

「還暦は赤色ですからね」

アナタはそう言って、ちよつときこちなく箱をワタシに渡した。ワタシは、ありがとう、と言って受け取り、早速箱を開けた。目が、口元が、顔の筋肉が、心が、全てが緩んでいるのが自分でも分かる。ペンダントネックレスだった。十八金ホワイトゴールドと球形の真紅な珊瑚。珊瑚を乗せた台座がまたとって

もおしゃれ。繊細な作りの花卉が幾層にも重なっている。

「前回お会いした時に、出会ったあの年に戻る、とおっしゃっていましたから、私もそうしました。実は、五、六年ほど前からきょうの日のために探し回っていました、去年、やっと見つけました。気に入っていただけるかどうかわかりませんが」

「とつても気に入りました。ありがとうございます。ございます。すぐつけていいですか？」

「ええ、もちろんです」

ワタシの身なりは、ショートボブの髪形に長袖で白のドライストレッチブラウス、紺色のスラックス。このペンダントはたぶんワタシにピッタリ。引き輪とプレートはアナタにお願いした。

「よく似合っています。…三十九年前の初めて出会ったあの日に戻る、という意味でこのペンダントを選びました。花卉は月下美人です。珊瑚はスキューバダイビングをやっ

ていたあなたの石です。赤色には、赤子という言葉もありますように無垢になる、という意味があります。三十九年前、あなたがハーモニーに入ってきた時、爽やかな風を感じました。二つ席を空けて座っている時、凜とした美しさを感じました。スキューバダイビングをやめて家業を継ぐ、と聞いた時に、この美しさは覚悟を決めた時の美しさだと思いました。あなたは美しかった。あなたは輝いていました。そして、あの時、あなたは悩んでいた私を救ってくれました。私の卒論は担当教官の勧めで、埋もれた詩歌の世界、でした。高く評価していただいて、大学院に行ってもフィールドワークを続けました。担当教官は、そのままこの研究を続けなさい、と指導してくださいましたが、私は、埋もれて見えない世界に対して、本当に一生研究するだけのボリュームがあるだろうか、と不安でした。担当教官とも気まぜくなり、不安な状態で吾が守を歌っている時に、あなたが現れたのです。

私はあなたに出会って、ああ、この人も頑張っているんだ、この方の背負っている重さに比べたら私の悩みなど取るに足らない。進もう、と決心しました。神を信じているわけではありませんが、神があなたを遣わした、と本当に思いました。そして、三年に一度会って、次の三年に向かって頑張ってきました。私のきょうがあるのはあなたのお陰です。あなたにはいくら感謝しても足りません」

ワタシは泣いていた。通じ合っている、と心の中で何度も叫んで泣いていた。もうこれ以上話を聞くことが出来ません。二時も疾とづくに過ぎ、弦月が辺りを照らし始めた。少し歩きましょう、とアナタを促して外に出た。岬の先に向かってゆっくり歩いた。アナタの手を握った。アナタも握り返した。三十九年間で初めて、手を握り寄り添って歩いた。

しばらく歩いて車に戻った。  
シートを倒し、天井を見ながら、ありがとうございます、と言った。アナタも天井を見

ながら、こちらこそありがたい、いつも感謝  
しています、と言った。

「そろそろ三時ですね」

アナタの声を遠くに聞きながら、ワタシは  
寝入った。

翌朝目覚めると、ワタシは自分の車にいた。  
アナタはもういなかった。寄り添って歩いた  
時、明日も採集がある、と言っていた。それ  
で早く発ったに違いない。胸には、三十九年  
前のワタシが、美しく輝いていた。

二〇一九年九月二十五日夜の十二時、十四  
回目のその日。やっぱりアナタの車は先に着  
いて、休憩所の近くで待っていた。

そばに停めて降りようとする、その車か  
ら先に人影が降りて来た。ライトに照らされ  
た顔は、アナタに似ているけどアナタではな  
い。タケヒコ、毅彦君？

ワタシも車を降りた。

「驚かせてすみません。鈴木毅の息子で、

鈴木毅彦と申します」

「お顔があの方にそっくりです。すぐに分かりました」

「事情がありまして、今回は私が参りました」

「ベンチに掛けましょうか」

ワタシたちは休憩所の石細工のベンチに移動した。星明かりで視界は開けているが、相手の細かい表情までは確認できない。

「父は亡くなりました」

「今年ですか？」

覚悟していたような冷静なワタシの声。

「いいえ。三年前の九月十九日です」

「えっ」

思わずワタシは声を出した。ワタシたちは三年前の九月二十五日に会っている。そんなはずはない。

「その前の年に肺がんが見つかりました。ステージ3でした。手術して全て摘出したと思っていたら、再発しました。今度はステー

ジ4でした。放射線治療を試みましたがあまり効果がありません。それで、五月の下旬から入院して薬物療法に移りました。そして、退院することなく九月十九日に他界しました。あっけなかったです」

アナタ、嘘でしょう。三年前も案内状を送ってくれたじゃない。ここで会ったじゃない。今年も、七月に入ったらちゃんと案内状が届きましたよ。アナタ、嘘でしょう。

「入院して間もない六月の下旬に病室に行きましたら、父から、ここにお金を振り込んでおいてくれ、と携帯のメールを見せられました。なんの疑問もなく振り込みました。父は交友範囲が広がったため、私たちは今でも父の携帯はそのまま活かして、着信があると父の逝去を伝えておりますが、今年の六月、三年前と同じように振り込み依頼のメールが入りました。振り込みを完了して、気になるので先方に事情をお話して確認しました。父は入院する前に、未来へメッセージを届ける

タイムカプセル郵便を申し込んでありました。十年先まで予約してありました。三年前もそうですが、今年も、父は、病気を治してここに来るつもりだったのです。私は、あなたのこと気がなって調べさせていただきました。父は仕事柄常にメモを取っていて、あなたのことも書いてありました。安杖さん、ありがとうございます。父は、私たちきょうだいにとっても母にとっても、素晴らしい父親であり夫でした。これも全て、安杖さんのお陰でした。ありがとうございます……」

「……お母様はお元気ですか？ 妹の香奈子さんはお元気ですか？ 毅彦君も、お父様の後を継いで頑張ってくださいね」

毅彦君の声は次第に涙声になっていて、ワタシの声も涙声でした。

「はい、みんな元気です。私も頑張ります。ありがとうございます。……父のメモは私だけの宝物にします」

毅彦君は、気持ちの高ぶりをひと言ひと言



に込めて、はっきりと応えた。

チャイムが鳴った。もうすぐ仙台駅に到着する。夜がますます深くなっている。外気は八度前後だろうか。母の脳裏にある南の島は二十度を超えているはず。

「実はね、毅彦君と話をしている時、駐車場の入り口付近には白い車が一台停まっていたの。四十二年間で別の車が来たのは初めてのことよ。話が終わって、ふっと気がついたらもういなくなっていたけど。あの車、その方が乗っていたんじゃないかしら」

結子は、冷めたホットココアのボトルを窓際に置いた。その内に、母の心で息づく南の島とパウ岬に行ってみようと思った。

「あなたももう二十九歳ね。結婚どうするの。好きにしていいいけど、あなたは、みんなと力を合わせて無杖温泉を守っていく役割の結子ですからね、これは忘れないでよ」

そう言うと、母は暗い外に目を移した。結

子もつられて外を見た。遠くの明かりとガラスに反射する車内の明かりがクロスする。母が軽い寝息を立て始めた。襟元の赤い珊瑚が凜として美しい。次駅の盛岡までは四十分もある。そして、その後もしばらく新幹線に揺られる。結子は、手に持っていたコートを母の膝にそっと掛けた。

三年後の二〇二二年七月。

安杖みゆきのもとに、吾<sup>バジ</sup>が守<sup>カリ</sup>研究会からハガキが届いた。〈案内状——九月二十五日研究会を開催します。万障お繰り合わせの上ご出席ください——〉。

「若女将、九月二十五日を挟んで四日ほど出かけるから、留守、お願いよ」

みゆきは、デスクのパソコンで予約状況を確認している戸<sup>と</sup>蒔<sup>ま</sup>結子の肩を、ポン、と叩き事務的な口調で言った。結子が驚いて顔をあげると、みゆきが優しく笑っていた。〈了〉